

城西大学女子短期大学部生の英語力の特徴

中 島 直 樹

平成13年4月4日、城西大学女子短期大学部英語力調査が実施され、外国人留学生を除く104名の女子短期大学部新入生が受験した。近年、短大を取り巻く環境が変化し、それに伴い様々なタイプの学生が入学するようになった。学生の英語力にも多様化の現象が見られ、ある程度基礎力のある学生とあまり基礎力のない学生との差が以前より大きくなったように感じられる。そのため、実際の授業に入る前に学生一人一人の英語力がどの程度であるかを教師があらかじめ認識しておくことがより必要になった。また、その調査結果を基に一年次の英語の必修科目であるプラクティカル・イングリッシュとカレント・イングリッシュを能力別のクラス編成にして、これまで以上に授業の効率化と学生のレベルアップを図ろうというねらいで、数年前から新入生全員に対して実施されている。

本論は、これまでの経営学科と文学科から経営情報実務学科と現代文化学科に改組された後に初めて入学した本年度学生の英語力調査の結果を昨年度の学生の結果と比較することにより、新学科に入学した学生の英語力がこれまでの学生とどう違うのかということを検討し、本学学生の英語力の特徴を明らかにしようとする試みである。

1. 今年度の結果について

まずはじめに、今年度の英語力調査を振り返ってみたい。出題形式は全問マークシート方式、試験時間は一時間、全50問で100点満点の試験であった。昨年度と同一内容の試験問題であるため昨年度の新入生との比較が可能である。受験できなかった学生もいたが、新入生のほとんどにあたる104名が一斉に受験した。全体の平均点は約35.4点であった。学科別の受験者数と平均点は以下の表の通りである。

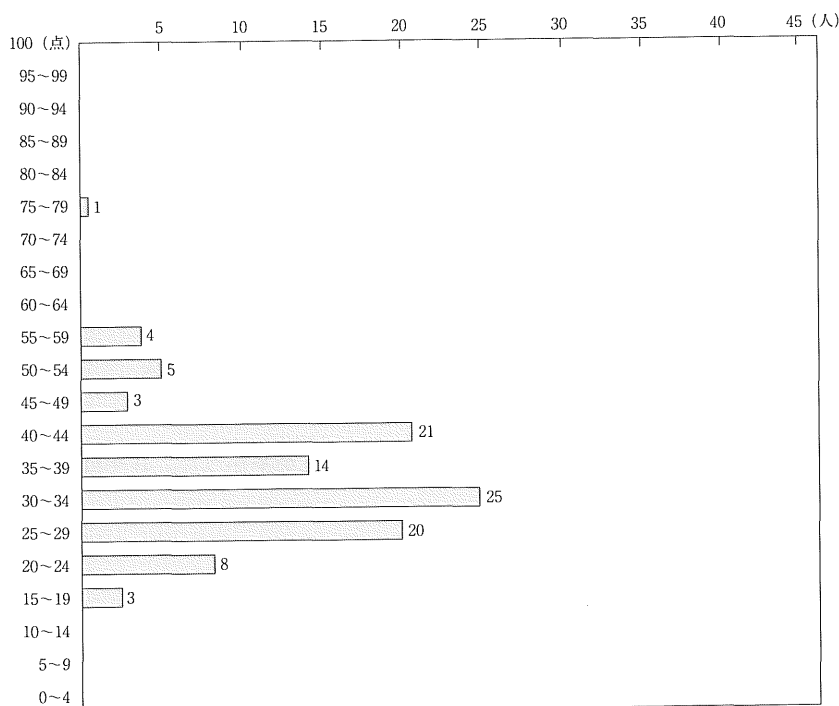
学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	81名	約35.3点
現 代 文 化	23名	約36.0点
全 体	104名	約35.4点

平均点の約35.4点という数字は当初予想していたよりもかなり低かった。最低限の基礎力があると思われる数字（45点程度）には程遠いものであった。過去数回の英語力調査の中で今年度の新入生の平均点が最も低いという結果になってしまった。次の表は昨年度の学科別（改組前）の受験者数と平均点である。

学 科	受験者数	平均点
経 営 学 科	149名	約37.9点
文 学 科	55名	約39.4点
全 体	204名	約38.3点

昨年度は経営学科よりも文学科の平均点の方が高かった。これは英米文学専攻の学生が健闘したため（平均点約44.5点）であった。昨年度の全体の平均点は約38.3点であり、今年度の平均点はこれよりも2.9点下がってしまった。実際に授業を担当していて、学生が英語の基礎力を十分には身に付けていないのではと感じることがしばしばあるが、それが数字の上にも表れた結果になった。

次に、全体の得点の分布を見てみることにする。100点を5点刻みに分け、それぞれの得点層に何人の学生が分布しているのかを表したのが次のグラフである。



今年度の学生の得点分布はこのようになっているが、この分布は昨年度のそれと比べて大きく変わっており、本学の新しい特徴ではないかと思われる。昨年度のピークは30~34点のところに

あり、40～44点、35～39点と続いていた。この三つの得点層は一つの大きな集団を形成していて、全体の受験生のほぼ半数がここに集中していた。そして、この半数にも及ぶ大きな層を取り囲むようにして、その前後に、ある程度基礎力のある学生の層（45～49点の層と50～54点の層）とほとんど基礎力のない学生の層（20～24点の層と25～29点の層）があり、この二つの層の学生数はほぼ同数であった。60点以上のかなり基礎力のある学生も14名おり、最高点は70点であった。それと比較して、今回の結果はどうであろうか。ピークは昨年度と同様に30～34点のところであり、40～44点、35～39点の層の学生数も多い。しかし、昨年度と大きく異なるのは、25～29点の層の学生数が非常に多くなったということである。40～44点の層と並んでピークのすぐ次に位置している。昨年度には大きな集団の周辺にあった層が今年度ではその集団の中に入り込んでしまったのである。基礎力に不安のある中間層が今まで以上に膨れ上がったと言える。今回のもう一つの特徴は、今までかなり基礎力があるとされてきた60点以上の層の学生がほとんどいなくなったことである。このことも、今年度に入学者の中間層の肥大化をよく物語っていると言える。

2. 問題の検証

次に、実際に出題された問題を検討し、正解率の高かった問題や低かった問題について特に気づいた点を昨年度と比較しながら検証していきたい。

まず、最も正解率の高かった問題は21番の

(21) John and Patty enjoyed with each ().

1. another 2. other 3. one 4. two

であり、正解率は79.8%であった。5人に1人以上が each other を知らず、不正解者のほとんどが another を選んでいた。昨年度の正解率は86.7%であった。

反対に、最も正解率の低かった問題は15番の

(15) It is impossible to finish this work () six o'clock.

1. by 2. until 3. for 4. in

であり、正解率は10.5%であった。なぜか for を選んだ学生が多かった。昨年度の正解率は25.0%であった。

次に、英語基礎力を試すために3番の出題をした。

(3) I'm fond of () baseball game.

1. watch 2. watched 3. watching 4. to watch

この問題は約半数の学生が正解していたが、4人に1人以上が watched を選び、前置詞 of の後ろに動詞の過去形をつなげていた。

同様に基礎力を試すために出題した5番であったが、正解率は12.5%と低かった（昨年度は

16.1%)。

(5) They are looking forward to () you next week.

1. meeting 2. meet 3. have met 4. met

過半数の学生が to に引きずられて原形の meet を選択していた。これは昨年度も同様であった。look forward to～ing は、高校の時に教科書や参考書にきちんと向かったことのある者ならば何度も目にしてはいるはずのイディオムであり、この問題ができないということは、高校の時に英語を勉強する習慣がついていなかったのではないかと思わざるを得ない。

しかし、そうかと思えば9番や11番の問題は約半数の正解率である。昨年度は半数を大幅に超えていた。

(9) I'd like to read books () in easy English.

1. written 2. wrote 3. write 4. writing

(11) It () since this morning.

1. is raining 2. has been raining 3. rained 4. rains

(9)の動詞の過去分詞や(11)の現在完了進行形の内容はある程度理解しているのであろうか。得意分野と不得意分野のばらつきが目立つ結果となっている。

次に、基本的なイディオムを問う問題の正解率を見てみよう。まず、on footが54.8%、be famous forが53.8%、get offが27.8%、be full ofが33.6%、意外にもfillを選んだのは4.8%に過ぎなかった。take care ofが65.3%、take part inが41.3%、see offが17.3%、go for a walkが48.0%、not at allが68.2%、be good atが42.3%、It's no use～ingが28.8%、rob A of Bが25.9%。また、in front ofが39.4%の正解率であるのに対し、break outが56.7%というのはどういうことなのであろうか。

最後の並べかえの問題(英作文)では、It is for～ to～の基本的な構文が見抜けていなかったり、動詞askの使い方やso～that構文に習熟していないために正解できなかったりするケースが目立った。

3. おわりに

最後にもう一度、全体の調査結果を振り返り、今後の英語教育の指導について考えてみたい。実際に授業をしていて、かなりの基礎力を持った学生がいる反面、全く基礎力のない学生もいて、その中間にある学生がどこに居るのかがつかみにくかった。ほとんど基礎力のない学生が圧倒的なのか、それとももう少し上のレベルの学生が多いのか、また、その割合はどのように分布されているのかなどが把握しにくい状況にあった。今回の英語力調査の良かった点のひとつはこのようなことははっきりしたことであろう。基礎力に不安のある学生が相当多いということが本学の特徴なのである。そして、この傾向は今年度に一段と強まったと言えよう。単にできない学生が

多くなったとか、様々な学生が入学するようになったために裾野が広がったということがしばしば言われるが、厳密に言うと、それらは正しい分析とは言えない。あくまで本学の基準ではあるが、中間層の学生が以前より多くなったのである。このことは、25～29点の層の学生数の比率が昨年以上に大きくなったことと60点以上の層の学生がほとんどいなくなったことに端的に示されている。これをプラス思考で考えれば、学生のレベルがあるところに集中しているのであるから、これまで以上に指導がしやすく、やり方によっては授業の効率化が図れるのではないだろうか。今現在、様々な指導法を検討中であるが、そのひとつとして、来年度からはマルチメディア教材を活用していく方針である。また、能力別クラス編成で授業を行い、全学生に TOEIC 受験を義務づけ、そのスコアを基にして後期にクラス替えをすることも決まっている。英語の基礎力を更に充実させることに比重を置き、短大生の英語力のレベルアップにつなげていきたい。